P01

当クリニックのⅠ期治療を再評価する
第１報　叢生治療のあり方を考えさせられた１例

○石谷徳人[1,2]，前野孝枝[1,2]，倉谷華奈[1]，
徳永まどか[1]，前田愛里[1]，山﨑要一[2]
（[1]医療法人 イシタニ小児・矯正歯科
クリニック，[2]鹿大･院医歯･小児歯 ）

【目 的】 当クリニックでは、継続的な口腔管理の中で起こるさまざまな歯科的問題について、独自に考案した管理システムを導入し、各管理ステージを段階的に経て咬合治療を行っており、長期管理の中で場当たり的な対応に陥らないように心掛けている。今回、当クリニックにおける混合歯列期咬合治療（Ⅰ期治療）を再評価するために、第１報では混合歯列期から永久歯列期にかけて行った叢生症例の２段階治療について報告する。

【症 例】 初診時年齢９歳２か月の男児。上顎側切歯がなかなか生えてこないことを主訴に来院。ANB 2.0°、FMA 30.5°であり、Skeletal Class Ⅰ、High angle 傾向の叢生と診断した。Ⅰ期治療では前歯部の萌出スペース確保を目的として、上下顎にクワドヘリックスとバイヘリックスをそれぞれ装着し、側方拡大を行った。Ⅱ期治療では小臼歯抜歯を検討したが、保護者の強い希望により、非抜歯にて治療を開始した。治療では、インプラントアンカーを併用した装置を用い、上顎第一大臼歯を遠心移動しながら、マルチブラケット法にて永久歯全体の排列を図った。

【考察およびまとめ】 開院当時、明確な位置付けもなく、Ⅰ期治療を開始したために、患者と保護者に誤解を与えてしまい、非抜歯治療を前提にⅡ期治療を開始することになった。本症例では良好な永久歯列咬合を得ることができたが、「叢生のⅠ期治療は永久歯の非抜歯を必ずしも約束するものではない」と反省するきっかけとなった。現在ではⅠ期治療の目標設定を明確にし、Ⅱ期治療での対応を常に念頭に置き、患者と保護者の理解を得ながら進めるべきであると考えている。

P02

当クリニックのⅠ期治療を再評価する
第２報　反対咬合治療前後のセファロ分析による検討

○前野孝枝[1,2]，石谷徳人[1,2]，倉谷華奈[1]，
徳永まどか[1]，前田愛里[1]，山﨑要一[2]
（[1]医療法人 イシタニ小児・矯正歯科
クリニック，[2]鹿大･院医歯･小児歯 ）

【目 的】 当クリニックでは、継続的な口腔管理の中で起こるさまざまな歯科的問題について、独自に考案した管理システムを導入し、各管理ステージを段階的に経て咬合治療を行っており、長期管理の中で場当たり的な対応に陥らないように心掛けている。今回、当クリニックにおける混合歯列期咬合治療（Ⅰ期治療）を再評価するために、第２報では反対咬合患者群のⅠ期治療前後におけるセファロ分析による検討を行ったので報告する。

【対象と方法】 対象は当クリニックにおけるⅠ期治療患者で、上顎前方牽引装置を毎日10時間以上使用した小児20名（男児･女児ともに10名；平均年齢8.8±1.5歳）である。研究方法は本研究で設定したセファロ分析項目において、Ⅰ期治療前後での差異の有無と、治療開始年齢と装置使用１か月あたりのセファロ分析項目の変化量との相関を検討した。

【結果と考察】 Ⅰ期治療前後のセファロ分析項目において、FMA、Gonial angle、U1 to SN、overbiteを除くすべての項目で有意差が認められた。また、治療開始年齢とセファロ分析項目の変化量との相関においては、ANBの増加と最も高い相関を示し、SNA、Convexity、AB to MP、Witsの増加と、APDI、KIXの減少においても高い相関を示した。

以上の結果から、治療開始年齢が早い程、上顎の前方成長の効果が高いことが示された。反対咬合のⅠ期治療では被蓋改善だけでなく、骨格的な問題改善にも目を向けるべきであり、本対象患者も含め、Ⅱ期治療の実施においても下顎の成長評価と共に、今後さらなる検討が必要であると感じた。